Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

人間発達についての関係学的考察（ＸＸＸⅣ）

―――― 物の多面的活用による母と子のための集団活動 ――――

○佐藤　啓子　　小原　伸子
（文教大学人間科学部）　（文教大学人間科学部）

Ⅰ　目的

幼児の人間関係の諸相について、関係学的立場（創始者：松村康平）から、以下の観点について明らかにする。

（１）　自己・人・物の接在共存を可能にする３才児とその母たちのための集団活動プログラムの試案を作成し、実践する。

（２）　それは、人間形成にとってどのような意義をもたらそうとしたものであるか、設定者（リーダー）の側から、関係学の立場に基づいて明らかにする。

Ⅱ　方法

心理劇法　参加観察法　実践法

Ⅲ　経過

文教大学幼児集団研究会における特別活動＜１９９９年１２月１０日（金）＞、プログラム「母と子のための心理劇」の活動資料を基に分析・考察する。

Ⅳ　結果および考察

１　ウオーミングアップ：
フラフープを使っての自己紹介

（１）円陣になったグループメンバーの中央に、Ｌ１（リーダー１，監督）が何本かのフラフープを携えて位置する。全員にフラフープを高くかざしながら示し、最初の一本をメンバーの一人に渡し、順に回す。次いで、２本目、３本目と渡し、次第に早く回す。
（２）フラフープを床につけて、転がしながら回す
（３）三本のフラフープを重ね、テレビジョンに見立て、テレビが自分のところへ来たら、順に自己紹介をする。
（３）最後に、帽子、紙テープ、スカーフ等で変身したＬ１がテレビの前に立ち、実は自分が宇宙人“ピロロ”であり、これからみんなを宇宙へ案内するために、宇宙からはるばるやってきたことを伝える。

＜設定の意図＞

・見慣れない新しい人（Ｌ１）とも、いつもの仲間とも共に出会いを受け入れ、（人関係）、安定した情況で集団に参加し（自己関係）、集団状況下に投入されたフラフープとふれることを楽しめるようにする（物関係）。（cf. Fig. 1）

・フラフープを手回ししたり、テレビになったフラフープで自己紹介することは、与えられた課題（物：O）を自己に取り入れ、即ち自己と物との関係における起動点ｂが成立し、物領域における外接運動の展開および自己領域における外接運動の展開する意義がある。

・他者の自己紹介を知り、それとは異なる自己紹介をすることは、人（Ｐ）と自己（Ｓ）との関係における起動点ｃが成立し、人領域および自己領域における外接運動が展開する意義がある。（cf. Fig. 2）

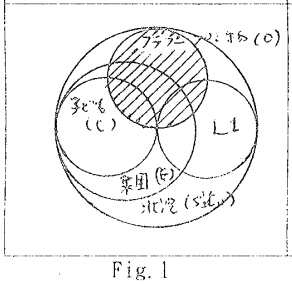
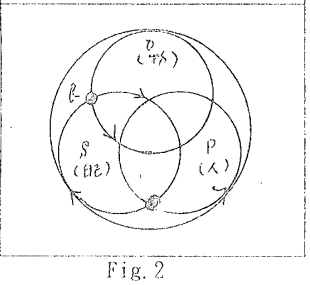
関係構造	起動点の成立と移動
	

Fig. 1　　Fig. 2

２　宇宙探検隊の旅

（１）星の精（子供たちグループ）には、空飛ぶ円盤（フラフープ）が渡され、これから円盤に乗って宇宙の旅へ出向くことが伝えられる。
（２）母グループは別室へ移動し、３人１組の星になり、円盤の旅人を迎える準備（どんな名前の・どんな特色があり・どんな迎え方をするのか）をする。
（３）星の精たちが円盤を連ねて、宇宙の旅へ出発、途中で様々な星に立ち寄って、それぞれの星から歓待される。
（４）歓待を受けた後、これから星の王子様が待っている宇宙原っぱへ行くことが、Ｌ１より伝えられる。
（５）全員が円盤に乗って、別室の宇宙原っぱへ移動。

＜設定の意図＞

・これまでは、集団における個人としての安定化・明確化がめざされたが、ここではサブ集団内個人としての役割、つまり子供たちは星の精としての、母たちはそれぞれ特色のある星の役割を取れることがめざされている。同質メンバーとしての交流と異質メンバー間の交流とを楽しめることがねらいである。（cf. Fig. 3）

・自集団活動に参加して楽しんだり、自分の意志を述べることは、自己と人との関係における起動点ｃが成立し、人領域において内在・内接・外接運動を展開し、新な起動点ａ・ｄ・ｆの成立を誘って、人領域を顕在化させていることである。（cf. Fig. 4）

・他集団の活動を見たり、他集団を意識しながら自集団活動を実践できることは、自己と人との間の交叉領域の成立を意味している。

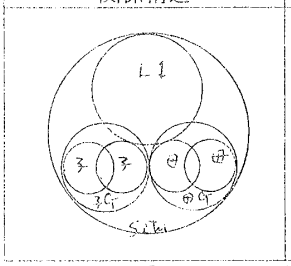
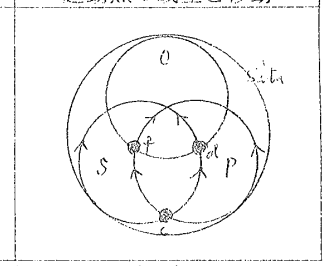
関係構造	起動点の成立と移動
	

Fig. 3　　Fig. 4

＜実践例＞

・小さいフラフープに母が３人づつつかまり、流れ星になって隣室へ移動する。大きいフラフープに幼児が３人づつ乗り、母たちを見送った後、それらのフラフープをリーダーがつないで一つにし、隣室へ行く準備をする。

・Ｌ１の合図によって隣室へ出向くと、４つの星が出来ていて、幼児たちを待っている。

①お花の星：きれいな花がたくさん咲いていて、花の匂いをふりまく星。幼児たちは花の匂いをもらう。
②キラキラ星：手をキラキラさせながら、フラフープを持って回る。幼児たちの一つのグループが、真似て踊る。
③インデイアンの星：インデイアンたちが口に手を当てて、「アワワ」と言いながら踊る。幼児たちの一つのグループが「アワワ」と言いながら踊る。
④ゲームの星：クッションとフラフープを使い、くぐったり、渡ったりする。幼児たちの中からやりたい幼児が出て来て一緒に遊ぶ。

NII-Electronic Library Service

・全員のフラフープが合体して一つになり、星の王子様に会いに行くため、隣室へ移動する。

3　宇宙原っぱでの円盤運動会

（1）フラフープの円盤に乗って、別室の宇宙原っぱへ到着する。そこに、星の王子様（L２）が待っている。
（2）L１より、これから円盤運動会の行われ、よくがんばった人には、最後に王子様からごほうびがもらえることが伝えられる。
（3）円盤運動会の開始
①円盤サッカー：フラフープのゴールにビーチボールを、星の精が順に足で蹴って入れる。（宇宙人：母たちは見ている人）
②円盤バスケットボール：リーダーによって高く掲げられたフラフープのバスケットの中に、宇宙人が順にビーチボールを入れる。（星の精は応援する人）
③円盤リレー：床に一定の間隔で並べられたフラフープの中をくぐって走り抜け、走り終わったら次の人にタッチし、タッチされた人が次に走る。
④星の王子様から全員がごほうびをもらう。

＜設定の意図＞

・方向性を示す人（L１）と、ゲームを外から眺めている人（星の王子様）とゲームを演じる人（子・母・リーダー）との３つの役割構造の中で自らの役割行動をとれるようにする。

・これまでは、主として自分とフラフープ（自己－物関係）を中心としての取り組みであったが、ここでは自分と人とが共にフラフープへかかわる（自己・人関係における物）体験の育つことがめざされる。

・課題に即してフラフープの様々な使い方を知り、実践することが出来る（物と物との関係に自己がかかわって関係を発展させる）ようにする。（cf. Fig. 5）

・状況の変化に応じて「する」役割、「見る」役割のそれぞれを担えるようにする。

・フラフープの様々な使い方を知ったり、課題に即して他者と共にフラフープを使いこなすことは、起動点ｅが新たな起動点ｄ・ｆの成立を誘って、自己領域・人領域を接在的に運動することである。（cf. Fig. 6）

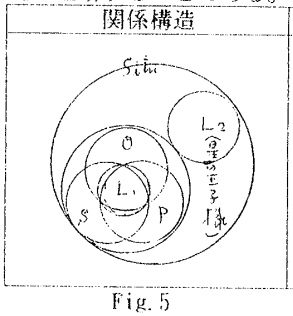


Fig. 5

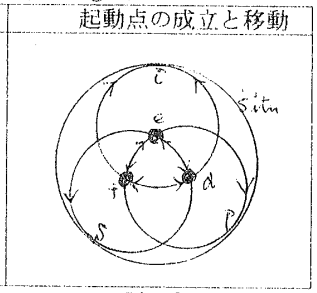


Fig. 6

4　宇宙劇場での円盤劇

（1）L１により、これから宇宙劇場で円盤劇を見たり、やったりすることができることが伝えられる。自分達で劇をして、友達に見てもらおう、と呼びかける。
（2）全員が２つのグループに別れ、１つのグループが別室へ移動する。
（3）自分達のグループに名前をつけ、それぞれのグループ毎に、サブグループリーダーを中心に、どんな劇をするか相談する。
（4）互いに、自分達の劇を見せ合う。

＜設定の意図＞

・他集団に自分達の劇を見せるという目的意識をもちながら、自集団内成員の一員として行為する。

・集団間の交流を楽しめるようにする。（cf. Fig. 7）

・目的意識をもちながら集団の一成員として活動し、それを実現させることの出来ることは、自己と目的（物）との関係を集団（人）との関係で発展させる起動点ｄ，集団の一成員として（自己と人との関係において）目的（物）を実現させようとする起動点ｅ、集団の目標（人と物との関係）を自己に取り入れて発展させる起動点ｆ、を成立させることであり、同時により拡大された集団状況を創り出していることにおいて、起動点ｄ・ｅ・ｆから新たな起動点、ｇ・ｈ・ｉを成立させる運動を展開しているとみなされる。（cf. Fig. 8）

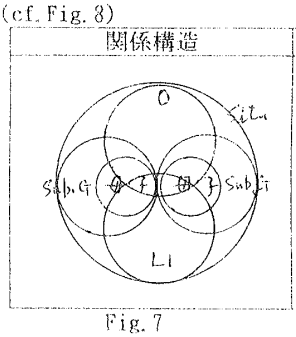


Fig. 7

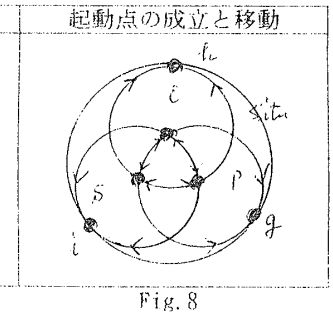


Fig. 8

＜実践例＞

・２つの星のグループ（「不思議の国の星」グループと「おもしろ星」グループ）がそれぞれの劇を相談するために、別々の部屋に別れる。

・「不思議の国の星」の劇を「おもしろ星」の星たちが見る。「この国では何でも出来る星です」との解説に始まり、①ピアノ演奏、②バレエ、③親子で分かれてボールの蹴飛ばしあいが演じられる。

・「おもしろ星」の劇を「不思議の国」の星たちが見る。クッションのお城の中にいる２人のお姫様に、長い布の川を渡ったり、フラフープの洞窟をくぐったりして会いにいく。とうとうクッションのお城にたどり着き、お姫様に会うことが出来る。

5　終結

（1）全員でそれぞれのフラフープの乗り物に乗って、別室の地球へ帰る。
（2）ピロロも変身し、もとの姿に戻る。
（3）全員で「ぞうさん」の歌を歌い、終わる。

V　総括的考察

（1）今回のプログラムは、物（フラフープ）を多面的に活用する（まわす、ころがす、テレビ、空飛ぶ円盤、流れ星、サッカーゴール、バスケットボールゴール、リレーの障害物、洞窟、他）ことによって、幼児やその母たちが多様な活用の仕方を知ると共に、フラフープの活用のされ方によって自分（自己）や他者（人）のフラフープ（物）へのかかわり方も変化することを体験していることに特色を見いだすことができる。特に母たちにとっては、リーダーによって用意された活用の仕方以外に、小グループ毎に独特の活用の仕方（お花、星の光、インデイアンの装具、ゲーム用具、等）がされており、創造性が具現している。

（2）また、様々なサブ集団（幼児どうし、母親どうし、幼児たちと母たちの、など）による、先を予測しての相談活動・相談のまとめ・結果の表現という一連の活動を通して、過去・現在・未来が連続する意味活動、集団と自己と目標との関係、等の体験が育っていると考察される。

（3）関係構造、起動点の成立と移動から言えることは、まず関係状況における物領域を顕在化させることによって、物の特性が自己領域や人領域へ取り入れられる起動点ｄやｆが成立する運動が展開し、さらにこの起動点ｄやｆが中心となって、自己と人との関係が次々に新しく築かれる集団活動の展開したプログラムである、ということである。

NII-Electronic Library Service